

災害伝承の担い手たちの誕生 —宮城県名取市閑上地区の事例—

小西 賢 *・李 仁子 *

本稿は、東日本大震災の被災地である宮城県名取市閑上地区において2つのグループと1つの施設に着目し、災害伝承の担い手が誕生するまでの過程を記述し分析した。2つのグループは「閑上の記憶」と「閑上震災を伝える会」、および名取市によって設置された「名取市震災復興伝承館」である。

「閑上の記憶」は、閑上中学校遺族会による慰霊碑の建立や毎年3月11日の「追悼のつどい」およびNPO「地球のステージ」による「心理社会的ケア」といった活動から始まったグループである。

「閑上震災を伝える会」は避難所での復興に向けた会議や地域住民への情報発信を目指して「閑上復興だより」の作成から始まったグループである。「名取市震災復興伝承館」は名取市によって震災伝承の施設として設置されたものである。災害伝承という実践において、グループの経験や成り立つまでの経緯によって重視する事柄が異なることを明らかにした。

キーワード：災害伝承、東日本大震災

はじめに

- 1 研究目的 研究方法
- 2 本研究の視座
- 3 組織の成り立ちと伝承活動の定着

津波復興祈念資料館「閑上の記憶」

「閑上震災を伝える会」

「名取市震災復興伝承館」

「名取市震災復興伝承館」をめぐる議論

- 4 考察

はじめに

本稿は災害の伝承について宮城県名取市閑上地区を対象として考察する。伝承という行為は、伝承を行う側と受け取る側によって成り立つ。一般的に災害が発生するとそれを経験した人々によって災害を伝えようとする試みが生まれる。災害を経験しなかった大多数の人は、伝承活動を通じて災害に関する知識を獲得することが出来る。本研究では、宮城県名取市閑上において震災の伝承活動を行っている人々が担い手として誕生するまでの詳細を整理し分析したものである。

* 東北大学大学院教育学研究科

災害の伝承に携わる担い手の誕生を詳細に見ることは、時間の経過とともに結果として形作られた伝承施設や語り部の伝承行為などを理解する上で重要なものと言える。アンソニー・オリヴァー＝スミスは『災害の人類学』¹で災害の捉え方として、災害は出来事（イベント）ではなく過程（プロセス）であることを強調している。まさしく本研究もそのような観点から伝承に携わる人々の誕生を分析したものである。

2011年3月11日に発生した東日本大震災において津波被災地では震災伝承に関して様々な取り組みが行われてきた。近年はそれらがネットワークを形成する動きが活発になるなど震災の伝承に関わる動向も中長期的に変化している。東日本大震災の津波被災地は東北沿岸の数百キロに渡るため、伝承活動を行う施設や組織も広範囲に点在している。伝承活動を行う主体も個人や組織、民間あるいは行政、建物や展示の有無のように、その形態は多様である。そのため、東日本大震災の伝承に関しては広域的な視点と局地的な視点を総合することが求められる。ただし本研究は広範囲に多数ある様々な伝承施設を網羅的に対象としたものではない。本研究は一つの地域において伝承活動がいかに関心されているかに焦点を当てたものであるが、特殊な事例の研究ではなく、災害後に人々によって行われる伝承行為には類似した点があるため、普遍的な洞察を含むものである。

1 研究目的 研究方法

本研究では名取市閑上において伝承活動を行っている2つのグループと1つの施設を取り上げる。本論文の目的は、災害伝承活動の担い手として誕生するまでの詳細な過程を記述すると同時にその分析を行うことである。その際にそれぞれの成立過程、活動内容、主体間の相互関係に着目する。2つのグループは「閑上の記憶」「閑上震災を伝える会」、1つの施設は「名取市震災復興伝承館」である。

本研究は名取市閑上におけるフィールドワークによって行う。名取市閑上における人類学的調査は2018年から行っており、本稿で論じるグループとコンタクトをもっていたが、本稿に関わる調査は概ね2021年を通じて実施した。先行研究については、災害や戦争の記憶と伝承に関わる研究、および災害の社会文化的分析に関わる研究を活用する。

2 本研究の視座

伝承に関する研究とは、疾病や戦争、大事故、公害、災害といった幅広い領域に対して行われる。本研究では、宮城県名取市閑上地区における東日本大震災の伝承に関して、2つのグループと1つの施設に着目して検討するが、米山リサ『広島 記憶のポリティクス』においては、原子力兵器による都市の消滅をめぐる「記憶の政治」をテーマとして、権力が「想起」と「忘却」をコント

¹ Susanna M. Hoffman. & Anthony Oliver-Smith. 2002 Catastrophe & Culture: The Anthropology of Disaster. p3
(若林佳史(訳者) 2006 災害の人類学—カタストロフィと文化) p7

災害伝承の担い手たちの誕生
—宮城県名取市閑上地区の事例—

ロールし、記憶の忘却を加速させ、記憶を平板化しようとするのに対して、さまざまな立場の人たちが記憶を風化させないように多角的な動きをした足跡を記している。

災害に対しても主体によって異なる記憶と伝承が生まれることは、ある災害に対する解釈が多様であることを意味する。この前提として、アンソニー・オリヴァー＝スミスは『災害の人類学』において、災害は物質的かつ社会的な事象／過程であるので多次的であること、災害は社会によって組み立てられるということを指摘した。

本稿では、災害に巻き込まれた人や集団、機関が長期にわたって要望や関心を取り上げ交渉し、そうした複雑な議論において災害の本質が理解されるという視座を背景として、災害の記憶と伝承に関わる具体的な主体に着目する。災害を誰が、いつ、どのように解釈、表象、具象化し、記憶の生成と定型化に関与するかに着目することは、すなわち長期に渡って展開する災害の一過程を記述して明らかにすることである。文化人類学では、ある現象を他の現象との関連性のなかで分析するホリスティック（全体的、総体的）なアプローチが重視されるため、本稿では伝承活動の展開過程を明らかにするために、グループが生まれたきっかけや伝承活動が始まる以前の動き、および関連する動きについて整理し、それらが伝承活動へと連続していった流れを記述する。これは震災後に行われた諸々の活動が始めから組織的な伝承活動としてスタートしたわけではなく、伝承活動の発端となるような個人の行いや、行政やNPOといった外部との関わり等によって徐々に伝承活動が形成されたからである。

3 組織の成り立ちと伝承活動の定着

本稿では名取市閑上において現地で伝承活動を行う2グループ「閑上の記憶」と「閑上震災を伝える会」および名取市によって設置された施設「名取市震災復興伝承館」を取り上げる。閑上ではこれ以外にも個人、団体、企業等によって現地案内等の伝承活動が行われてきたが、本研究では上記の2グループについて伝承活動の成立過程および活動内容について記述し、続いて「名取市震災復興伝承館」について記述する。その内容を「閑上の伝承グループと施設に関する年表」として表1に整理する。

津波復興祈念資料館「閑上の記憶」

閑上中学校では東日本大震災の津波によって、全校生徒156名のうち14名の生徒が犠牲となった。Yさんは当時中学生だったお子さんを亡くされた方で、その後「閑上の記憶」の創設に携わった方である。Yさんは避難所から仮設住宅へと移り瓦礫が残る閑上の自宅跡地を歩き来する生活を送っていた。2011年6月にNPO「地球のステージ」²代表理事、心療内科医で名取市内にある東北国際クリニック院長であった桑山紀彦医師と知り合う。桑山医師は震災直後から名取市で緊急医療支

² 特定非営利活動法人「地球のステージ」は心療内科医の桑山紀彦医師が代表理事を務める団体で、災害時の緊急医療支援や紛争地・被災地での心のケアを中心として活動し、東日本大震災に際しては、名取市を拠点に医療支援や心のケア、津波復興記念資料館「閑上の記憶」の運営に携わった。

援やその後2年間に渡って「心理社会的ケア」による子どもたちへのこころのケアを行った医師である。Yさんは2011年9月に閑上中学校の前に手を合わせられる場所として“手作りの献花台”を作った。献花台が出来ると自然と人たちが足を止めるようになり、そうした中、「学校が残っているからみんな助かったね」という声が聞こえたという。Yさんは「閑上中学校は午前中に卒業式が終わった後で子どもたちは学校にいなかったということ」を伝える必要を感じ、ここで何が起きたかを語り始めた。Yさんは「地球のステージ」の協力を得ながら、亡くなったお子さんと生徒たちの生きた証として慰霊碑の建立を発案し、2011年11月には閑上中学校遺族会が結成された。震災から1年後の2012年3月11日には慰霊碑の「除幕式」が行われ、翌月2012年4月には慰霊碑を守る社務所として「閑上の記憶」が設立された。その翌年からは「追悼のつどい」が毎年3月11日開催されることとなり、毎年続けられている。

「閑上の記憶」では、映像や新聞記事、文献などの資料や遺族によって提供された生徒たちの遺品が閲覧できるほか、「心理社会的ケア」の活動によって子どもたちが制作したジオラマの作品の展示を行い、震災に関する様々なことを知りたいと訪れる来館者を受け入れ、震災について伝え続けている。その中でも、「閑上の記憶」においては「命の大切さ」を伝えることが最も重視されている。これは「閑上の記憶」が亡くなった子どもたちのために震災直後の極めて混乱した状況において閑上中学校遺族会が結成され、慰霊碑が建立され、「追悼のつどい」を執り行うといった過程を背景としているからである。

「閑上震災を伝える会」

「閑上震災を伝える会」について整理するにあたり先に全体の流れをまとめる。まず2011年に「閑上復興だより」という新聞作りが始まり、翌年2012年に「閑上震災を伝える会」が設立された。その後、2017年に社団法人「ふらむなとり」が設立した。これらの活動を率いてきたのが閑上に住んでいたNさんである。続いて詳しく活動の過程を整理していく。

2011年3月14日NPO法人「ロシナンテス」³の理事長であり医師の川原尚行氏が名取市内の館腰小学校体育館に入り医療ボランティアを開始した。4月下旬にはNさんやロシナンテスのメンバーらによる話し合い「どうする閑上」が避難所の体育館で開かれるようになった。名取市の避難所が6月に解散すると「どうする閑上」の会議はロシナンテスが活動拠点としていた名取市内のお寺で続けられた。こうした中、会議を行っていたメンバーらは2011年8月に、福岡西方沖地震（2005年）の被災地である玄海島に復興の視察に行き、そこで地域新聞「玄海島復興だより」の存在を知り、Nさんらは閑上で新聞を作成することを決めた。2011年9月19日には名取市役所前広場で「閑上復興芋煮会」を開催し、約1000人の住民が集った。そこで約300軒の住所を集められたことで「閑上復興だより」の制作が始まった。2011年10月には創刊号が1500部発行された。この活動

³ 認定NPO法人ロシナンテスは福岡県北九州市に本部を持ち、アフリカ・スーダン等で医療、教育等の活動を行っている。東日本大震災に際しては巡回診療やがれき撤去、閑上復興だより、寺子屋の開講といった活動を2016年3月まで名取市や岩沼市、亘理町等で行った。

災害伝承の担い手たちの誕生
—宮城県名取市閑上地区の事例—

は、名取市の復興計画等の情報を各所で避難生活を送る住民たちに届けることを目的としていた。当時から今日まで続く情報発信のための新聞作り、住民が集うための芋煮会や花見等を含む一連の活動は「地域住民のつながり」「コミュニティ再生」というNさんの考えが通底している。

「閑上復興だより」と並行して、Nさんは2011年に名取市による語り部養成事業に参加し、南三陸や気仙沼での研修を経て、2012年3月に「閑上震災を伝える会」を設立した。ここからNさんは「閑上復興だより」と「閑上震災を伝える会」という2つの組織を運営することとなる。つまり「閑上復興だより」はNPO ロシナンテスと共同で始まった事業であるが、「閑上震災を伝える会」は行政の語り部養成事業にきっかけを持つ活動である。

「閑上復興だより」は2020年に第60号をもって終刊となり、「閑上だより」と名称を変えて現在も発行が続いている。「閑上震災を伝える会」は現在6名で活動을続け、現地での語り部ガイドを行っている。なお「閑上の記憶」では資料や遺品などの展示を行いスタッフが常駐しているが、「閑上震災を伝える会」はそのような展示施設をもっていないことは対照的である。

「閑上震災を伝える会」は、町の歴史、震災の経験と教訓、復興の歩み、減災・防災の情報等を伝えているが、閑上において多くの犠牲者が発生した理由を伝えることに重点を置いている。これは「名取市閑上地区の教訓」として4点にまとめている。①1933年の昭和三陸津波襲来の石碑という先人の教訓が伝わっていなかったこと、②1960年のチリ地震津波では閑上地区に浸水がなかったことが「津波が閑上に来ない」という神話を作ったこと、③東日本大震災では一度避難所に来た人が津波到達までの1時間6分のあいだに着替えなどを家に取りに戻った人が津波に巻き込まれたので「避難所に行ったら安全宣言が出るまでは勝手に移動しない」こと、④防災無線が機会の不具合で放送されなかったこと、の4点である。多くの来訪者は初めて閑上を訪れて震災に関する話を見聞きするという状況で、閑上で起きたこと、なぜ起きたのか、その「教訓」を伝えることに重点を置いている。

「名取市震災復興伝承館」

「名取市震災復興伝承館」は、2020年5月に開館した。「名取市震災復興伝承館」を管轄する名取市生活経済部商工観光課において、震災復興伝承館の趣旨と設置の経緯について聞き取りを行った。「名取市震災復興伝承館」は現在、一般社団法人「名取市観光物産協会」が指定管理者となり運営されている。

2014年に閑上のまちづくりの全体の計画において「河川防災ステーション」という防災拠点の施設を設置することが決定した。これは河川の氾濫や水害時に水防活動の拠点となる施設である。同時に市は震災の伝承施設の設置についても検討しており、「河川防災ステーション」を平時には震災の伝承施設として活用するという方針を決定した。この方針に基づいて、「名取市震災復興伝承館」および「震災メモリアル公園」が整備された。両者は“ゾーニング”によってその役割が次のように区別された。「名取市震災復興伝承館」は「復興の歩み」「災害への備え」「防災」「交流」の場であり、「震災メモリアル公園」は「慰霊」「鎮魂」の場であるとされた。これに従い

「震災メモリアル公園」内には名取市慰霊碑が建立され、歩道橋の一部等が、震災の遺物として保存、展示されている。

名取市として公的な伝承施設を設置する理由は、市としても閑上に記憶・伝承に関わる団体が複数存在していることは承知した上で、町全体の復興については民間団体だけで全てを担うのではなく市としての見解を表明する場が必要、という見解が示された。民間の伝承団体との違いに言及しつつ、例えば遺族の話が聞きたいというニーズがあれば「閑上の記憶」を案内すること、まちづくりや復興の歩みについて知りたいというニーズであれば「名取市震災復興伝承館」や「閑上震災を伝える会」を案内するというように、来訪者のニーズに応じて案内するようにしている。

2020年5月の開館以降、先の伝承グループが「名取市震災復興伝承館」を利用することがあるが、伝承館側が来館者に対して、どのようなやりとりを行うかは模索段階にある。現段階では、「名取市震災復興伝承館」に駐在する名取市観光物産協会の職員と来館者のあいだにやりとりはなく、来館者は館内の展示と資料映像を見るのみである。

名取市震災復興伝承館をめぐる議論

本研究において、伝承の主体に着目するきっかけとなったのは、「名取市震災復興伝承館」が設置されることに対して、名取市と2つのグループのあいだに見解の違いがあることに気が付いたことであった。2019年に「名取市震災復興伝承館」の建物が完成すると、名取市観光物産協会は市内の伝承グループに対して「名取市震災復興伝承館」に関する聞き取りを行い、そこで何をどう展示するか、どう運用するかといったことに関して各伝承グループが持つ意見を聞いている。「閑上の記憶」と「閑上震災を伝える会」をはじめ各グループは様々な意見や要望を持っており市側に伝えた。こうした要望や指摘の一部には次のようなものがある。「伝承館では遺構や遺品の展示は行うのか」「名取市震災復興伝承館の大きさは適切か」「伝承館が水防センターを兼ねており水害等の際には展示物を撤去することが前提であることへの指摘」が挙げられる。しかし市としては、水防センターの設置が先に決定し、平時には伝承施設として活用する計画があること、「復興伝承館」と「震災メモリアル公園」の役割のゾーニングも決まっていたため、伝承グループの要望や期待の多くは実現しなかった。

このような状況に関する聞き取り調査で「閑上の記憶」のYさんは、「市の復興伝承館はあくまでも復興の伝承館。「復興伝承館」には無いものが「閑上の記憶」にはあるし、「閑上の記憶」に無いものが「復興伝承館」にはあるので、それはそれでよいと思っている」という見解を述べた。

「閑上震災を伝える会」のNさんは「復興伝承館の展示には不満はある。協力できることはするけど、賛同できないことがあれば言う。持ちつ持たれつだと思っている」と述べた。名取市商工観光課への聞き取りでは、「民間の語り部団体による伝承には色々な思いがあるので、市による伝承とそれぞれの目的が同じ一点を見ていなくもいい」という見解を述べられた。

災害伝承の担い手たちの誕生
—宮城県名取市閑上地区の事例—

表1 閑上の伝承グループと施設に関する年表

	閑上の記憶	閑上震災を伝える会	名取市震災復興伝承館
2011 年	“手作りの献花台” (9 月) 「地球のステージ」の協力により慰霊碑建立の発案 閑上中学校遺族会の結成 (11 月)	N さんらと「ロシナンテス」が福岡県玄海島の視察 (8 月) 閑上復興芋煮会 (9 月) 「閑上復興だより」創刊号発行 (10 月)	
2012 年	慰霊碑を建立・除幕式 (3 月 11 日) 「閑上の記憶」設立 (4 月)	名取市による語り部養成事業の研修に参加 「閑上震災を伝える会」設立 (3 月)	
2013 年	第 1 回「追悼のつどい」 (以降毎年 3 月 11 日に実施)	「閑上震災を伝える会」事業化 (3 月)	
2014 年		「閑上復興だより」は「ロシナンテス」の支援から離れて発行開始 (4 月)	まちづくり計画にて「河川防災ステーション」の設置が決定
2015 年	かさ上げ・閑上中学校解体に伴い、慰霊碑・閑上の記憶は閑上 6 丁目に移転 (4 月)		
2016 年	閑上小学校・閑上中学校が解体		
2017 年		「閑上復興だより」 「閑上震災を伝える会」 「名取交流センター」	

		が合流、「ふらむなとり」が発足（4月）	
2018 年	慰霊碑は閑上小中学校の一画へ移設（3月） 閑上小中学校が開校（4月） 閑上の記憶は閑上5丁目に移転（5月）		伝承館開館に向けて各団体への聞き取り
2019 年			「震災メモリアル公園」開園（5月）
2020 年		「閑上復興だより」が第60号で終刊 「閑上だより」創刊号を発行	「名取市震災復興伝承館」開館（5月）
2021 年	閑上の記憶が社団法人化（年度内は地球のステージの運営からの独立の移行期として活動）		

4 考察

これまで名取市閑上において伝承活動を行っている2つのグループ津波復興祈念資料館「閑上の記憶」「閑上震災を伝える会」と1つの施設「名取市震災復興伝承館」に着目し、災害伝承の担い手として誕生するまでの詳細な過程を記述した。

「閑上の記憶」は閑上中学校遺族会を設立し、慰霊碑の建立、「閑上の記憶」を設立した。こうした経緯に基づき、それに共鳴する仲間によって活動が継続されてきたからこそ、「亡くなった命を忘れないこと」「命の大切さ」を伝えるという一貫性のある災害伝承が展開されてきたといえる。

「閑上震災を伝える会」は、住民への情報伝達のための「閑上復興だより」に続き、名取市による語り部養成事業をきっかけとして成立した。「閑上震災を伝える会」は防災、減災に貢献することを活動の一環として、閑上地域の被災とそこから導かれた閑上地区の教訓を、来訪者に分かりやすく伝えることを重視することで災害伝承を担うようになった。

災害伝承の担い手たちの誕生
—宮城県名取市閑上地区の事例—

「名取市震災復興伝承館」は公的な伝承施設という立場として「復興の歩み」「災害への備え」「防災」「交流」が重視され、「閑上の復興」に焦点を当てた展示の構成となった。それにより被災そのものよりは、その後の復興の歩みと街並みを強調するという特徴を帯びた。米山⁴は、広島市が戦争と原爆の「暗い」記憶に対置されるものとして「明るい広島」という公的表象を生産したことを語った。「名取市震災復興伝承館」においては行政による震災の表象として、閑上がいかに復興したかという点に重心を置いたのである。

本稿では、災害後にさまざまな文脈で作られるグループや施設は、そのグループの構成員や施設の属性によって災害に関して伝承しようとする事柄が異なり、それに共鳴する仲間が集まることで災害伝承の担い手が誕生するということを示してきた。東日本大震災の被災地における伝承活動には本稿で取り上げた主体と似通った面も多いことが推測され、災害伝承という実践においてグループの経験や成り立つまでの経緯によって重視することが異なるということは災害伝承を分析する一つの手がかりとなるものである。

謝辞

本研究の調査にあたり津波復興祈念資料館「閑上の記憶」の関係者の皆様、「閑上震災を伝える会」の関係者の皆様、名取市生活経済部商工観光課の職員2名の方にご協力頂きました。誠にありがとうございました。

本研究は韓国学中央研究院の海外韓国学萌芽型育成事業による支援を受けて行いました。重ねて御礼申し上げます。

参考文献

川原尚行 2015

『行くぞ！ロシナンテス 日本発 国際医療NGOの挑戦』山川出版社

桑山紀彦 2017

『心理社会的ケアマニュアルー傷ついた心に寄り添うために』福村出版

Susanna M. Hoffman. & Anthony Oliver-Smith. 2002

Catastrophe & Culture: The Anthropology of Disaster. School of American Research Press.

(若林佳史(訳者) 2006 災害の人類学ーカタストロフィと文化 明石書店)

⁴ 米山リサ『広島 記憶のポリティクス』p77

米山リサ 2005

『広島 記憶のポリティクス』 岩波書店

特定非営利活動法人 地球のステージ（制作・発行） 2017

「閑上の記憶」公式パンフレット

閑上復興だより（制作・発行） 2015

『閑上復興だより記念誌 ゆりあげ前進 もう一度心をひとつに』

一般社団法人ふらむ名取（発行元） 2018

『ゆりあげ前進 もう一度心をひとつに』 vol.2

The Birth of Disaster Tradition Actors —A Case Study of Yuriage District, Natori City, Miyagi Prefecture—

Ken Konishi¹ and Inja Lee¹

¹ Graduate School of Education, Tohoku University

Abstract

This paper describes and analyzes the process by which two groups and one institution in the Yuriage area of Natori City, Miyagi Prefecture, a disaster-stricken area of the Great East Japan Earthquake, have emerged as actors of disaster tradition. The two groups are the Memory of Yuriage and the Yuriage Earthquake Telling Group, and the Natori Earthquake Reconstruction Museum established by Natori City.

Memories of Yuriage is a group that started with the construction of a memorial monument by the Yuriage Junior High School Bereaved Families Association, the annual "Memorial Day" held on March 11, and the psychosocial care provided by the NPO Frontline. The Yuriage Earthquake Telling Group started with the creation of Yuriage Fukko Dayori (Yuriage reconstruction newsletter), which is aimed at disseminating information to the local residents as well as meetings at evacuation centers for reconstruction. The Natori Earthquake Reconstruction Museum was established by the city of Natori as a facility to pass on the disaster. The study revealed that the importance of the practice of passing on disaster information differs depending on the experience of the group and the circumstances that led to its establishment.

Keywords : Disaster Tradition, East Japan Earthquake